

柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌
 住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1
 柿生中学校内
 電話:070-1503-6401、044-988-0004
<http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo>
 第131号

多摩丘陵に残る
 義経の面影 - 5

義経と笹子姫 (その2)

麻生観光協会理事 麻生歴史観光ガイドの会名誉会長 松本良樹

(前々号から続く)この結果、後白河の第二皇女 笹子姫も身の危険を感じ、従者 5 人の武士と乳母をつれ、この関東まで逃がれてきます。最初に落ち着いたところは古沢であったという。(何故? この事は後に触れます)笹子姫は無事関東まで逃れたことを後白河法皇に報告し、後白河法皇は一刀三礼仏(一刀彫る毎に三度礼拝して仏像を彫る)の阿弥陀如来坐像を笹子姫に届けるのです。やがて笹子姫は高石の法雲寺の近くの庵に住んだとされ、逝去後は開発前の万福寺に、笹子稲荷という塚に乳母と共に埋葬されたという事です(右写真参照)。

おそらく義経は笹子姫に何度もお会いし、平氏の横暴ぶりなど、詳しい情報入手したと思われます。武蔵国の国府があったこの近辺を精力的に歩き、どうして平家を滅ぼすか思案していたと思われます。いま、法雲寺に平安仏である阿弥陀如来が大事に保存されていますが、この仏様が後白河から頂いた仏像であるという証拠は何もなく、現在は川崎市の重要文化財として保存されていますが、この地では義経史話として残っています。本来なら国宝級の仏像であることは間違いないと思われます。現在では万福寺の土地開発が行われ、笹子稲荷はなくなりましたが代々この笹子稲荷を守ってこられた、うどん屋『ささご』のご主人が新しく『笹子稲荷』を作られて、うどん屋の右脇に設置されています。ご興味のある方は、一度訪ねてみては如何でしょうか。



新しい笹子稲荷

蛇足ながら、壇ノ浦で平家が滅亡した後、冒頭の大納言 平時忠は文官であったため罪一頭を許され、能登へ流罪となりますが、都に文箱を置き忘れたため義経に返してほしい旨頼み、封を解かないまま返却されたお礼に、自分の娘(蕨(ワケ)姫)を娼にと差し出します。

二人は仲睦まじく逢瀬を過ごしますが、ほんの束の間であり、最後の一夜を過ごす時忠の娘 蕨姫はつらからば 我もろともに さもあらで など浮人の 恋しかるらむと和歌を読み、さめざめと泣いたと『尊卑文脈』に記載されています。大物浦から落ち延びる時には兄 時実も同行しているので娘も一緒にいた可能性もあります。

私は、能登に流された時忠卿の上時国家(カミツクニ)に三度行ったことがあります。大変立派な佇まいでした。その時に撮影した写真を添付しておきます。



平大納言時忠卿が奥能登に流罪となる、珠洲大谷に残る上時国家です。唐破風の玄関、格天井、梁や大黒柱の太さには驚きです。また籠が4丁残っていました。この地には義経が奥州平泉まで逃れる際、蕨姫を連れて時忠卿に面会したという伝承が伝わっています。

現在でも子孫の方が住んでおられ 24 代目(1999 年当時)ということでした。

シリーズ
「麻生の歴史を探る」 第101話

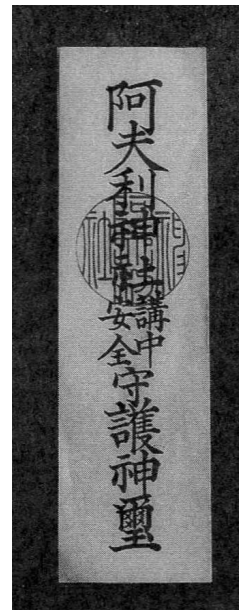
大山講 ～雨乞い～

小島 一也 (遺稿)

「水は天から、貰いもの」降れば洪水、照れば渇水。自然現象を相手とする農業は、台風・水害・日照り干ばつと、村の人たちは生活の中で自然を畏敬してきました。特に稲作にとつての渇水は命取りで、各地で「雨乞い」という農民による信仰が行われています。

江戸末期この地方に起きた干ばつは、横浜・川崎・町田市史によると、元禄14年(1701)の4月～5月は34日間雨が降らず、翌々年16年5月、玉川登戸河原の松・杉が枯れた(町田市史)といい、宝暦2年(1752)も厳しい干ばつで、「田場格別渇水仕早われ候」(市史菅村)とあります。続いて宝暦10年(1760)にも大干ばつがあり、明和7年(1770)の日照りは、水稻はおろか麦・大豆の畑作物まで枯死させたといい、文政4年(1821)は春に雨が降らず夏も少なく、二ヶ領用水では溝の口騒動(市史)を起こしたと記されており、これ等は歴史に残る干ばつでした。谷戸田の多いこの地方では、早野七つ池をはじめとする溜池が造られますが、枯渇の時もあったと思われ、局地的な水不足は村々を襲っており、この「雨乞い」は、各地に多くの伝承・逸話を残しています。

細山の神明社には、今も2本の竹筒が大切に保存されているそうです。これは大山詣での「雨乞い」に使ったもので、この竹筒伝承は、早野や宿河原にも残されています。相模の霊峰大山は、海拔1,252m。山頂に「阿夫利神社」が祀られ、別名「雨降山」と雨乞い信仰で知られ、麻生から相模の大山までは片道40km、早野に残る伝承は代参人3～4名が連れ立って夜半に家を出て、阿夫利神社(奥の院)の冷水を竹筒に2個いただき、御神符を買ってくるもので、途中立ち止まると、水の流れが止まるという縁起から、休まずに帰り、村の人達が待つ「林ヶ池」に竹筒の水を流し、祈祷のお札に水を浸したそうです。細山村の雨乞いも、代参人3～4名で2本の竹筒を背負い、「サング、サング、ロコンショウジョー」と夜の山を登り、早野同様、休まず帰ると、ここでは村人が、神明社下の小川を堰き止めて待っており、竹筒の霊水を「種水たねみず」と崇めてそこに流し、御神符を竹竿に挟んで立て、ここでも「さんげ、さんげ、六根清浄」を繰り返して唱え、裸で水を掛け合い、神明社の大太鼓を打ち鳴らして、雷雲の出るのを祈ったそうです。



講中札

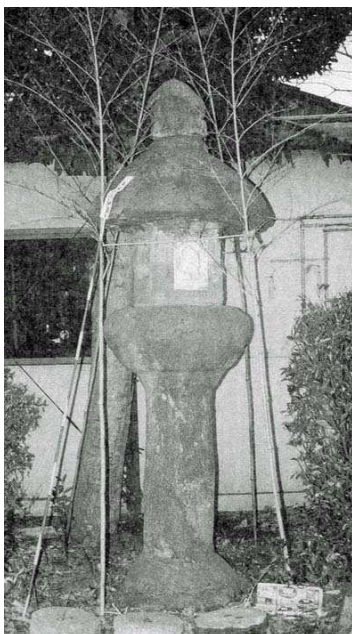
宿河原の雨乞いの行事は、正八幡神社に村人が集まって、御神酒、供え物を献じ、代参人2名が選ばれ、腰に竹筒を携えて阿夫利神社に詣でます。御師(おし)から「霊水」と、「御幣(ごへい)」と呼ぶ竹串に挟んだ紙で折られた神符を頂き帰りますが、八幡社には、四斗樽に2/3ぐらい水を入れた樽が待っており、そこに竹筒の霊水を入れ、「御幣」を捧げ持つ二人の代参人の頭に樽の水をかけ、雨乞いをしたと伝えられます。

この大山信仰は、雨乞いだけではなく、特に江戸時代、富士山と並ぶ霊山と庶民の信仰を集めていました。4月5日から20日を春山といい、7月27日から8月17日を夏山と呼び、白い行衣、腰に鈴を付け大山詣での講中が山を賑わせますが、それを証明するのが大山街道(現国道246号線)で、その間道は現多摩区・麻生区を通っていました。

多摩区長沢四丁目、米山商店は、「かどや」「ヤンカ」と呼ばれる老舗で、その街角には「大山道」と刻まれた道標と「大山献灯」と呼ぶ燈籠が、昭和初年頃まではありました。ここは、世田谷の喜多見や狛江から、登戸で多摩川を渡り、生田の大道・長沢・王禅寺・恩田を経て相模に通ずる大山道の支道で(今も交差点あり)、その昔、この燈籠は大山詣での善男善女の足元を照らしたと思われ、米山商店主(勝美氏)のお話では、昭和30年頃までは、村の有志により毎年春山(4月5日～)になると、2～3基の大山献灯が復元、灯がともされていたそうで、四丁目辻の献灯には注連縄(しめなわ)が張られ、雨乞いが行われていたようです。



長沢の道標



大山燈籠

なおこの燈籠による大山信仰の行事は、下麻生にも昭和10年頃までありました。これは山開きの初日より、下麻生の根方講中(字花島)の講員が、現小島商店前に常夜灯を立てて菜種油を灯して、五穀豊穰、村内安全を願うもので、いかに相模の大山が、霊峰として崇められていたかが判ります。

参考資料:「伝説さんこんにちは(土方恵治)」「七つ池とともに」「柿生岡上村郷土誌(柿生小学校)」「川崎市史」「ふるさと麻生」「川崎の大山講(川崎市民俗文化調査報告書)」

シリーズ
教育の歩み 第2部

学級の誕生(1)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

◆初期の中等教育◆

近代が始まった頃の学校には、学級は存在しませんでした。学生が自由に授業や先生を選択する大学は別として、初等学校や中等学校は、共に一つの教場しか持たず、1人ないし2人の先生しかいなかったのです。教室は修道院の一室であったり、回廊であったり、民家の一室だったりしたのです。明治の学制の公布後に開かれた日本の初等学校の多くが、寺院や神社の一郭だったり、大きな農家の納屋などを利用させてもらっていたことも、符合する事実でした。

18世紀までの学校には、生徒を年齢や能力に応じて分けるという発想そのものがなかったのです。そこには、難易度や年齢に配慮するという感覚自体が欠けていたのです。当然このような学校には、カリキュラムなど存在しませんでした。教師は1人1人の生徒を相手に、個別に授業していたのです。そこには一斉授業という考え方のものがなかったのです。

現在の学校では、誰が、何時、何処で、何を、誰から学ぶかが、細かく決められ、それが時間割という形で示されます。しかし、初等教育の拡充が叫ばれ始めた頃から、19世紀に至るまでは、細かな授業計画を事前に立てるということはありませんでした。教師は1人1人の生徒に個別に教えるのですから、その場に座っている生徒が誰かによって、教える内容やレベルを決めていたのです。現在なら、計画性のない場当たり主義だと厳しい批判にさらされるでしょうが、当時はそれが当たり前だったのです。明治維新の英傑を多数輩出したことで知られる、吉田松陰先生の「松下村塾」も、このようなナイナイ尽くしの学校でした。そこには時間割など存在せず、門下生の出入りも不規則で、



松下村塾の内部 8畳のこの部屋が教室でもあった

出欠の記録はもちろん、門下生名簿すらなかったことが知られています。

要するに、昔の学校は、場当たり主義的に運営されていましたから、学級という仕組みを必要としなかったのです。学級が誕生し、次第に受け入れられていくのは、教えることにまつわる様々な事柄が、事前に計画されるようになることが必要でしたし、初等教育が普及し、大勢の子どもたちが初等学校にやってくるようになることが必要だったのです。

◆ジョセフ・ランカスターの試み◆

19世紀の初めに、ロンドンのサザーク地区(ウエストミンスターやビッグ・ベンの対岸の一角です)という、当時の貧民窟の一郭で、ジョセフ・ランカスターというクウェーカー教徒の青年が、風変わりな教え方をする学校を始めました。

彼の教育システムは、モニター・システムと命名されたのですが、生徒の編成の仕方と教え方が、今までの学校のシステムと全く違っていたのです。そこでは、先生(マスター)が生徒に教えるのではなく、モニターと呼ばれる生徒が、他の生徒たちに教える方式をとっていたのです。彼の学校は、読み書き計算を教える初等学校でしたが、ランカスターは生徒の中から、年長で比較的優秀な生徒を選び出し、まずは彼らにだけ必要な知識を教え込んだのです。こうして最初に教えを受けた生徒たちがモニターとなって、他の生徒たちに対する先生役を担ったのです。モニター役の子どもたちは、10人ぐらいずつに分けられた他の生徒たちに対して、自分が先生に教えられた読み方や書き方、さらには計算を教えるのです。ランカスター先生の



ジョセフ・ランカスター

学校は、読み方と計算の能力で、生徒たちをグルーピングしました。こうして分けられた生徒たちの集団がクラスと呼ばれたのです。何度も試行錯誤を続けた結果、最終的に読み方で8クラス、計算で12クラスに、生徒たちは振り分けられました。読み方と計算による能力別編成が、教授活動の前準備として取り入れられたのです。

ランカスター青年が、サザーク地区の父親の家を借りて、最初に学校を立ち上げたのは1798年のことでした。彼は面倒見が良く、貧しい住民や子供たちを差別しなかったため、そうした親子に人気が高く、彼の学校には大勢の子どもたちが集まってきました。当時の学校ですから、当然有料なのですが、彼は生徒数が増えるにつれて授業料を引き下げ、より多くの子どもたちが通えるように、何時までも清貧に甘んじていたのです。

その甲斐あって、多くの生徒が集まったのですが、生徒数が多くなると、伝統の1対1の指導法では対応できなくなります。かといって、必要なだけ先生や助手を雇うとなると、雇用した先生や助手の給料分だけ授業料を値上げしなければならなくなります。授業料を値上げせずに、大勢の生徒たちに同時に教える方法はないものか？ランカスター青年は、この難問をどう解くかを考え、その思考の過程でひらめいたのが、生徒が生徒に教えるという教授法だったのです。彼は、自身の学校運営について、「教育を経済的に実施するためには、助手に替えてより効率的な代替者を見出すことが大切である。代替者として、助手に替わって生徒が教えるためには、教授システムを単純化する必要があった。」と、1810年に執筆した著書の中で、述べています。(続く)

柿生郷土史料館催物案内 【参加自由、入場無料】

◎開館日:奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日 (原則として月4回)

4月 6・20・27日(毎土曜日) **5月** 12・26日(毎日曜日)

◎開館時間:午前10時～午後3時 4月13日、5月5・19日は休館です。)

柿生郷土史料館友の会
第10回史跡見学バスの旅

近代日本のルーツを訪ねる上州路の旅 ～キリスト教会と生糸産業～

日 時 : 2019年4月18日(木)
主な見学先 : 安中教会 新島襄記念会堂
富岡製糸場

- 募集人員 : 先着44名
- 集 合 : 午前7時45分 新百合丘駅北口
- 解 散 : 午後6時30分頃(新百合丘駅北口→柿生駅付近)
- 費 用 : 9,000円
- 申し込み : 往復はがきに必要事項を記入の上、柿生郷土史料館まで
- 必要事項 : 参加者全員の郵便番号、住所、氏名、年齢、連絡先電話番号
- 送 付 先 : 215-0021 川崎市麻生区上麻生 6-40-1 柿生中学校内 柿生郷土史料館
(お近くの史料館支援委員にお渡しいただいても結構です)
- 申込締切 : 3月25日(月)
- 問合せ先 : 小林基男 (080-5513-5154 または 044-989-0622)

明治維新150周年記念 協賛企画 第2弾 協力 町田市立自由民権資料館

第78回
カルチャーセミナー

明治10年代の武相地域に 自由民権運動は何をもたらしたのか

第1日目が延期となり、ご迷惑をおかけしておりましたが、再日程が決定いたしました。

明治という時代は、日本が欧米諸国の攻勢からいかに独立を維持していくか、悪戦苦闘しつつ、次第にその実現を確実にしていった時代でした。そうした中で、イギリス型の立憲主義の実現をめざした自由民権運動は、議会政治の定着に一定の成果をあげました。武相地域がこの運動にどうかかわったかについて、町田市立自由民権資料館の学芸員の皆様にお話しいただく3週連続講演の、延期になっておりました第1日目です。(第2日目、3日目は1月に終了しております。)

再
日
程

- 日時 : 5月26日(日) 午後1時30分～3時30分
- 講師 : 松崎稔氏(町田市立自由民権資料館学芸員)
- 会場 : 柿生郷土史料館特別展示室
- テーマ : 武相の民権運動とその特徴

第16回 特別企画展

「くらしの窓」に見る柿生地区の今昔 その4 ～ 平成前期 ～

昭和30年創刊の地域のミニコミ誌「くらしの窓」が捉えてきた地域の姿を紹介してまいりましたが、今回は昭和の終わりから、平成前期を中心に、人口急増期の地元の変貌の過程を紹介できればと考えています。

期間 3月3日(日)～6月15日(土) 会場 柿生郷土史料館特別展示室